

フランスにおけるブドウ栽培地域の変化

著者	手塚 章
著者別名	Tezuka Akira
雑誌名	筑波大学人文地理学研究
巻	17
ページ	33-48
発行年	1993-03-25
その他のタイトル	Recent Changes in French Viticulture Areas
URL	http://hdl.handle.net/2241/00127092

フランスにおけるブドウ栽培地域の変化

手 塚 章

- | | |
|----------------|--------------------------|
| I はじめに | III 醸造用ブドウ栽培地域における近年の諸変化 |
| II ブドウ栽培の地域的分布 | III-1 栽培面積の変化 |
| II-1 歴史的背景 | III-2 生産構造の変化 |
| II-2 醸造用ブドウ栽培 | III-3 品種構成の変化 |
| II-3 生食用ブドウ栽培 | IV むすび |

I はじめに

ブドウ栽培は、フランスを代表する農業生産部門である。1988年におけるブドウ栽培面積（約95万ヘクタール）は全農地面積のわずかに3.3%にすぎないが、ブドウを栽培する農業経営体の数は272,133に達しており、これは全農業経営体の26.8%に相当している¹⁾。また、醸造用ブドウの栽培とワインの生産は、フランスの全農業生産額の約1割を占めており、この比率はさらに増加する傾向にある。

フランスは、イタリアとならんで、世界最大のワイン生産国・輸出国であり、ドイツ・イギリスをはじめとして他国に大量のワインを輸出している。しかも、イタリアものが主としてテーブルワイン（大衆ワイン）であるのに対して、フランスでは上質ワインが高い比率を占めるため、生産額や輸出額で見るとフランスは第2位のイタリアを大きく引き離して世界最大のワイン生産国・輸出国である。

他方、フランスのブドウ栽培地域は、1970年代から1980年代にかけて、大きな変貌を強いられてきた。1人当たりワイン消費量の減少や上質ワイン志向など、ワイン消費をめぐるフランス国民の意識や行動は、近年大きく変わりつつある。また、イタリアやスペインなど、他のワイン生産国との競合も、フランスのブドウ栽培地域に構造転換をうながしている。醸造用ブドウの栽培面積が116万ヘクタール（1970年）から93万ヘクタール（1988年）に減少したこと、それ以上に、その農業経営体数が激減したこと（1970年の約66万経営体から1988年には約26万経営体）、1970年時点では全体の2割しかなかった上質ワイン用ブドウ栽培面積が1988年には5割を超えるにいたったことなどの事実が、近年におけるブドウ栽培地域の変容の大きさをものがたっている。

しかし、フランス国内の各ブドウ栽培地域で、具体的な変化の様相はそれぞれ大きく異なっている。ヨーロッパの主要ワイン生産国のなかで、比較的北に位置するフランスは、その自然的環境や歴史的背景の結果として、国内の各地に特徴的なブドウ生産地域を発展させてきた。それらのなかで最も南に位置するラングドック地方は、フランス最大のブドウ生産地帯ではあるが、もっぱら大衆ワインの産地として特色づけられてきた。したがって、醸造用ブドウ栽培をめぐる近年の環境変化が、この地

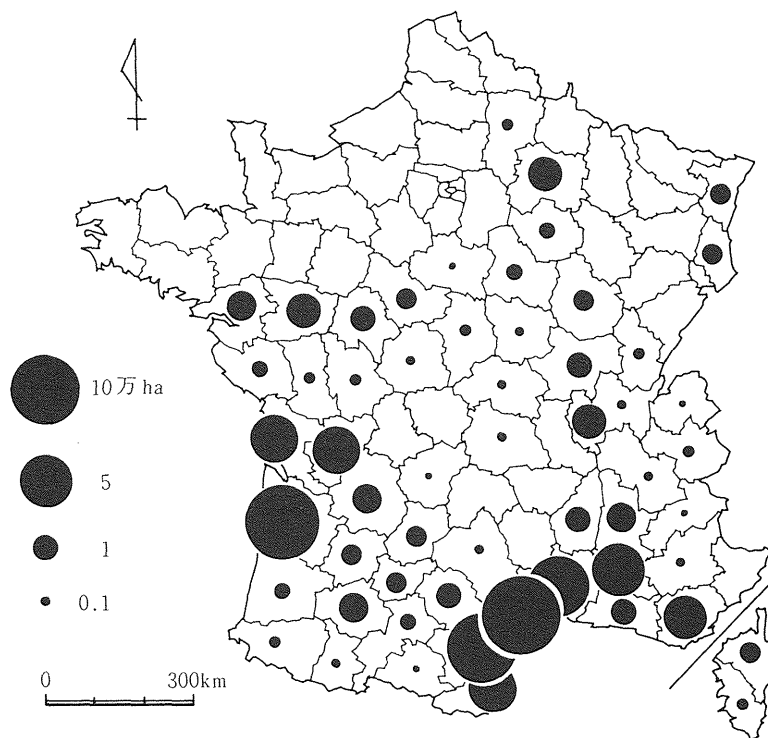
域に最大のインパクトを与えたことは容易に予想できる。

本稿は、1970年以降、近年におけるフランスのブドウ栽培地域の変化を、その地域的様相に着目しつつ明らかにすることを目的としている。そのさい、変化の具体的な側面として、立地変化・生産構造の変化・生産タイプの変化などの諸側面を主として取りあげた。また、地域的には、ラングドック地方の状況について特に詳しく言及した。フランス国内のブドウ栽培については、行政機関をはじめとして、さまざまな調査が行われている。以下では、1970年・1979年・1988年に行われた農業センサスの調査結果を主として用い、必要に応じて他の資料を参考にする事とした。

Ⅱ ブドウ栽培の地域的分布

Ⅱ-1 歴史的背景

今日、フランスのブドウ畑は、地域的にかなり片寄って分布している。第1図は、ブドウ栽培面積の分布を県単位に表現したもののだが、より上位の地方行政区画である「地域 (région)」の単位で見ると、地中海沿岸の諸地域(ラングドック・ルシヨン地域およびプロバンス・アルプ・コートダジュール地域)とボルドーを中心とする諸地域(アキテーヌ地域およびポアトゥー・シャラント地域)が、フランスにおけるブドウ畑の2大集積地域といえる。1988年時点で、これら2地区のブドウ栽培面積は、それぞれ461,625haと220,209haに達しており、両者をあわせるとフランス全体の約4分の3を



第1図 フランスにおけるブドウ栽培面積の分布 (1988年)

占める。

しかし、現状にいたるまで、フランスのブドウ栽培は過去2世紀にわたって、面積的にも地域的にも大きな変化を経験している。18世紀末の時点で、フランスのブドウ栽培面積は約120万 ha あったと推計されているが、その分布は現在よりも全国にずっと広く散在していた (Clout, 1983)。その後、19世紀にはいつからワイン消費がはじめて大衆に普及するようになり、ブドウ畑の面積もそれにつれて飛躍的に拡大した。ブドウ栽培面積が最大に達したのは1860年代のことであり、1862年に行われた調査では232万 ha という数字が報告されている。

これに対して、1870年代に猛威をふるったブドウアブラムシ病の蔓延を機に、フランスのブドウ栽培面積は減少傾向に転じることになる。また、栽培技術の革新（接木技術の普及・列植えの定着・犁耕の導入など）により、急斜面に位置するブドウ畑は放棄されるようになり、かわって谷底や海岸平野にブドウ畑が進出するようになった。

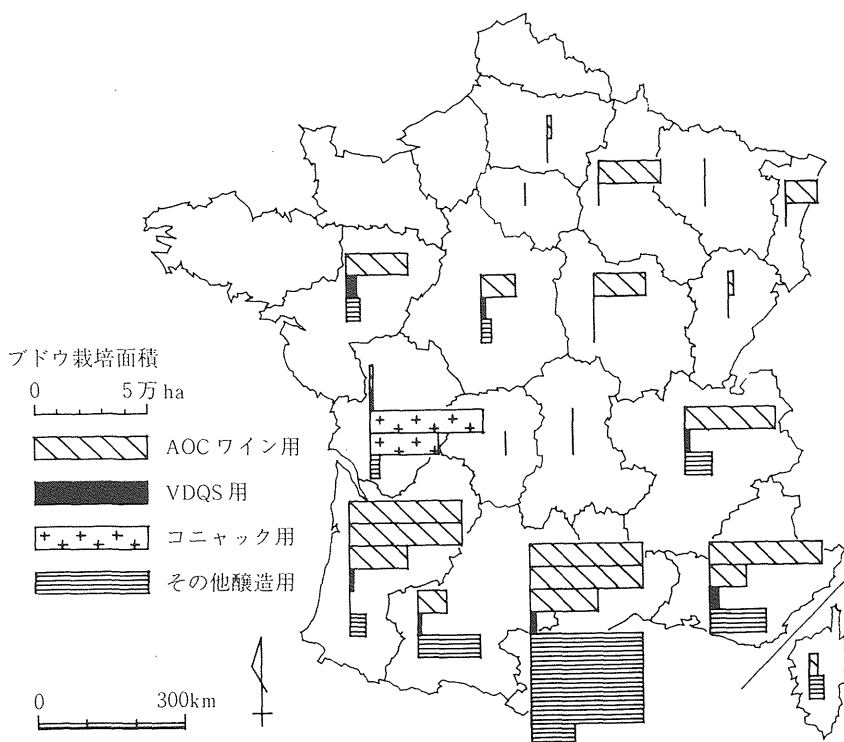
1862年に232万 ha あったブドウ畑は、約百年後の1956/58年に実施されたブドウ栽培センサス時には125万 ha まで減少している。すなわち、18世紀末の水準にもどったわけである。しかし、その地域的分布はまったく異なっていた。この減少期を通じて、フランス各地に存在していた市場立地型大衆ワイン産地は、自然環境にめぐまれた地中海沿岸の産地との競争にやぶれ、次々と姿を消していった。生き残ることができたのは、品質の高級化に成功した少数の産地だけである。ラングドック地方の大衆ワイン産地と、それ以外の地方の上質ワイン産地という現在みられる空間的パターンは、この時期に形成されたものである。

II-2 醸造用ブドウ栽培

フランスにおけるブドウ畑の大半は、いうまでもなく醸造用である。生食用ブドウの栽培面積は、1988年現在18,455ha で、これは全ブドウ栽培面積のわずか1.9%を占めるにすぎない。

フランスにおける醸造用ブドウ産地は、いずれも個性にとみ、全体として他国に例をみない多様性を示している。品種の多様性にくわえて、気候・土壌・栽培方式などにも大きな地域差がみられるため、結果として各産地がそれぞれ独自の性格をもった製品を生み出している。これらの産地を大まかに分類すると、主として大衆ワイン向けのブドウを栽培する地域と、上質ワイン向けのブドウを栽培する地域、さらにはブランデー（コニャック）向けのブドウを栽培する地域に分けられる。

第2図は、醸造用ブドウ栽培のなかで、これら3種類のブドウの内訳を地域別に示したものである²⁾。このうち、大衆ワイン向けブドウ栽培が卓越する地域は、ラングドック・ルシヨン；ミディピレネー；コルシカ島の3地域だが、面積的にはラングドック・ルシヨン地域に（さらに言えば、その中でもラングドック地方に）集中しており、ここだけで全国の大衆ワイン向けブドウ栽培面積の3分の2以上を占めている。実際、ラングドック地方では、1870年代にブドウアブラムシ病の被害をうけたのち、それまで傾斜地に限られていたブドウ畑が海岸平野に広く展開し、現在みられるような「ブドウの海」の景観が形成された。このため、ラングドック地方の農業に占めるブドウ栽培の比率の高さは、ヨーロッパのなかでも例外的な水準に達している。したがって、今世紀を通じて繰り返された



第2図 醸造用ブドウの用途別面積構成にみられる地域的差異 (1988年)

過剰生産／ワイン危機の影響を、もっとも敏感に受け止めてきた地域でもある (Pastor-Barrue, 1981)。

これに対して、ポアトゥー・シャラント地域は、そのブドウ栽培面積の大半がコニャック向けであり、きわめて特殊な地域的性格を有している。コニャック向けにブドウを栽培する農業経営体の大半は、みずからコニャックの生産を行っているわけではなく、ブドウ酒液の段階で大小さまざまなコニャック製造業者に売却している。

残りの諸地域では、いずれも上質ワイン向けのブドウ栽培が卓越しているが、その生産内容は多様である。そのことを端的に示しているのが、各地域における醸造用ブドウ品種の構成である。品種の違いに応じて製品の種類と品質に違いが生じ、各産地の製品に独特の性格が生まれることになる。

第1表は、代表的なワイン産地について、醸造用ブドウの代表的な品種の占有率を示したものである。これをみても、各産地には、それぞれの性格を象徴するような卓越品種のあることがわかる。たとえば、ボージョレ地方では Gamay 種が圧倒的な割合を占め³⁾、ブルゴーニュ地方でも Pinot noir 種が優勢である。また、白ワインで有名なロアル川下流地域では、Melon 種 (あるいはミュスカデ種) が卓越している。もちろん、品種の構成は、顧客の好みや流行の変化に応じて大きな変化をみせることもある。アキテーヌ地方 (ボルドー) の代表的品種である Merlot noir 種や Cabernet Sauvignon 種は、いずれも、1970年代以降に栽培面積を大幅に増加させたものであるし、アルザス地方でも同じ時期に Riesling 種が大きく伸びている。

第1表 代表的ワイン産地における醸造用ブドウの品種構成（1979年）

[単位：％]

産地	上位5品種					
	第1位品種	第2位品種	第3位品種	第4位品種	第5位品種	
ラングドック	品種名	Carignan noir	Aramon noir	Cinsaut	Grenache noir	Alicante Bouschet
	占有率	44.6	16.7	9.7	6.8	4.5
アキテーヌ (ポルドー)	品種名	Merlot noir	Cabernet Sauvignon	Sémillon	Cabernet Franc	Ugni blanc
	占有率	32.3	17.4	16.9	9.9	6.4
シャラント (コニャック)	品種名	Ugni blanc	Colombard	—	—	—
	占有率	93.5	0.8	—	—	—
ロアール川流域	品種名	Melon	Cabernet Franc	Chenin	Grolleau	Folle blanche
	占有率	24.5	14.4	14.1	11.0	8.1
アルザス	品種名	Sylvaner	Gewurtztraminer	Piesling	Auxerrois	Pinot noir
	占有率	22.8	21.2	18.6	9.3	5.1
シャンパーニュ	品種名	Meunier	Chardonnay	Pinot noir	—	—
	占有率	44.5	30.8	24.4	—	—
ブルゴーニュ	品種名	Pinot noir	Chardonnay	Aligoté	Gamay noir	Plantet
	占有率	70.7	12.4	6.9	5.9	0.7
ボージョレ	品種名	Gamay noir	Syrah	—	—	—
	占有率	98.2	0.5	—	—	—

(1979年農業センサス結果による)

注1) 表中の数値は、それぞれの産地の核心部を構成している県（複数の県にまたがる場合は、それらの合計）に関する値である。産地構成県は以下の通り。ラングドック（Aude県・Hérault県・Gard県）、アキテーヌ（Gironde県）、シャラント（Charente県・Charente-Maritime県）、ロアール川流域（Maine-et-Loire県・Loire-Atlantique県）、アルザス（Bas-Rhin県・Haut-Rhin県）、シャンパーニュ（Marne県）、ブルゴーニュ（Côte-d'Or県）・ボージョレ（Rhône県）。

注2) 占有率が0.5%未満のものは表中から除外した。

同じことは、大衆ワイン向けのブドウ栽培についてもいえる。ラングドック最大のブドウ栽培県である Hérault 県の場合、主要な品種はテーブルワイン（赤ワイン）の原料になる Carignan noir 種と Aramon noir 種であるが、このうち、品質面でおとる Aramon noir 種は、他の優良品種に植えかえられる傾向が強くなり、1970年代を通してその占有率を大幅に低下させた。

II-3 生食用ブドウ栽培

古い歴史をもつ醸造用ブドウ栽培に対して、生食用ブドウ栽培がフランスで本格的にはじまったのは今世紀に入ってからのことである。その栽培面積は1970年に37,697haに達し、生産量も30万トン近くにまで迫ったが、その後はむしろ減少傾向に転じ、栽培面積も1979年の30,878haから、1988年には18,455haへと落ち込んでいる。

生食用ブドウ栽培の地理的分布は、醸造用ブドウ栽培以上に限定されている。ローヌ川下流の Vaucluse 県、ガロンヌ川中流の Tarn-et-Garonne 県、ラングドック地方の Hérault 県・Gard 県の栽培

面積をあわせると、全国合計のじつに84.3%を占める。これら4県とも醸造用ブドウの栽培地域であり、生食用ブドウを栽培する農業経営体の多くは、同時に醸造用ブドウも栽培している。しかし、品種の点で両者はかなり明確に異なっており、1979年時点での調査によれば、Chasselas種・Muscat de Hambourg種・Alphonse Lavalée種の3つで、生食用ブドウ全体の4分の3近くを占めている。

他方、醸造用ブドウ栽培の場合と同様に、上述の3大産地は、品種構成の点でそれぞれ特色を有している。最大の産地であるローヌ川下流地域は、黒ブドウのMuscat de Hambourg種とAlphonse Lavalée種の生産によって特徴づけられる。これに対して、ガロンヌ川の中流地域ではChasselas種の栽培がさかんであり、面積の大半が白ブドウの生産にあてられている。また、ラングドック地方では、白ブドウと黒ブドウの両方が栽培されているが、白ブドウの栽培面積は大幅に後退しつつある。

Ⅲ 醸造用ブドウ栽培地域における近年の諸変化

Ⅲ-1 栽培面積の変化

フランスにおける醸造用ブドウの栽培面積は、今世紀を通じて一貫した減少傾向を示してきた。ピークを記録した1862年時点の栽培面積(232万ha)を、1970年時点の栽培面積(116万ha)と比較すると、ちょうど半分に減少しており、平均すると1年間に約1万haずつブドウ畑が消滅したことになる。このペースはその後とも衰えておらず、むしろ1980年代に入ってから、年間の平均減少面積が1.5万ha近くにまで達している。

これは、主としてテーブルワイン用のブドウ畑が急速に減少しているからである。1979年から1988年までの9年間に、テーブルワイン用およびコニャック醸造用のブドウ栽培面積は590,750haから418,736haへと激減しているが、その減少分の大半はテーブルワイン用のブドウ畑であった。これに対して、上質ワイン向けのブドウ栽培面積は、467,043haから510,866haへと、むしろ顕著な増加傾向を示している⁴⁾。

したがって、1980年代におけるブドウ栽培面積の変化は、製品のタイプを反映して、ワイン産地ごとに多様な動向を示している。代表的なワイン産地について、製品のタイプ別にブドウ栽培面積の増減をまとめると第2表のようになる。この表で、栽培面積を全体として減少させた産地は、ラングドック・シャラント・ロアール川流域の三つであるが、いずれにおいても、テーブルワイン用とコニャック用などを合わせた「その他の醸造用ブドウ栽培面積」が大幅な減少を示している。シャラントはコニャックを中心とする産地であり、収穫されたブドウの大半はコニャックの製造にあてられる。ここでの醸造用ブドウ栽培面積は、輸出拡大を背景として1970年代に大きな伸びをみせたが、1988年時点では逆に大幅な減少を記録している⁵⁾。また、ラングドックでは、上質ワイン向けのうち、VDQSワイン用のブドウ栽培面積が激減しているが、これは上のランクであるAOCワイン用に転換したためであり、両者を合わせた上質ワイン(VQPRD)向けブドウの栽培面積は、ほぼ同じ水準を維持している。ロアール川流域についても、栽培面積の減少はテーブルワイン用のブドウ栽培が急速に後退したためである。

このように、上質ワイン(とくにAOCワイン)用のブドウ栽培についていえば、どの産地でも現

第2表 代表的ワイン産地における醸造用ブドウの栽培面積の推移（1979-1988年）

[単位：％]

産地	年次	AOCワイン用 ブドウ栽培面積	VDQSワイン用 ブドウ栽培面積	その他の醸造用 ブドウ栽培面積	醸造用ブドウ 栽培面積 計
ラングドック	1979	21,003	74,717	245,235	340,955
	1988	90,646	2,404	210,827	303,877
アキテーヌ (ボルドー)	1979	94,882	28	5,109	100,019
	1988	108,323	0	1,667	109,990
シャラント (コニャック)	1979	38	0	105,002	105,040
	1988	75	1	85,889	85,964
ロアール川流域	1979	26,282	3,479	10,474	40,235
	1988	27,665	3,362	5,066	36,093
アルザス	1979	11,948	0	498	12,446
	1988	13,487	0	249	13,736
シャンパーニュ	1979	19,378	0	10	19,388
	1988	21,361	0	4	21,365
ブルゴーニュ	1979	7,771	0	515	8,286
	1988	8,385	0	182	8,567
ボージョレ	1979	19,469	384	616	20,469
	1988	20,840	0	219	21,059
フランス全体	1979	372,579	94,464	590,750	1,057,793
	1988	492,081	18,785	418,736	929,602

(1979年および1988年農業センサス結果による)

注) 各産地の構成県については第1表の(注)で示した。

状維持あるいは拡大の傾向を示している。とくにアキテーヌ(ボルドー)やアルザス、シャンパーニュなどの産地で、栽培面積が大きな伸び率を記録している。このうち、アルザスやシャンパーニュなどでは、消費の拡大につれてブドウ畑が新たに開かれた場合がほとんどであるのに対して、アキテーヌでは、かつてテーブルワイン用のブドウ畑であったものを転換した例が多い。

これら上質ワインを主とする産地に対して、ラングドック地方では、今日なおテーブルワインを製品の主体としている。テーブルワイン用のブドウ栽培面積は、1980年代に大きく減少したとはいえ、比率で見るとフランス全体の減少率をかなり下まわっており、全国的な占有率はむしろ上昇している。このような体質を改善するために、ラングドック地方では、上質ワイン用ブドウ栽培への転換や他の作物栽培への転換が、1980年代を通じて積極的にはかれてきた。

ブドウ畑の転換に対しては、すでに1950年代からフランスの国内政策として補助金が支出されてきた。これは、粗悪な品種のブドウ畑を他の作物や高級品種に転換させることを目的にしていた。これに対して、1976年からは、過剰生産の解消をめざすヨーロッパ共同体(EC)が、共通農業政策の一

環として、ブドウ畑を他の用途に転換する農業者に奨励金を支払うようになった。とくに1980年代に入ってから、適用地域の限定や奨励金の上積みが行われ、地中海沿岸のテーブルワイン産地に大きな影響をおよぼしている。フランスの場合、これによって放棄されたブドウ畑は、とりわけラングドック地方（なかでも Aude 県と Hérault 県）のテーブルワイン用ブドウ栽培地域に集中している（Bartoli, 1986）⁶⁾。また、上質ワイン産地への転換も着実に進展しつつあり、Pyrénées-Orientales 県を加えたラングドック・ルシヨン地域の AOC ワイン用ブドウ栽培面積は、1988年時点で、フランス全体の27%を占めるにいたっている。

Ⅲ-2 生産構造の変化

かつてのフランスでは、自家消費用ワインの生産をふくめると、大半の農家で醸造用ブドウを栽培していた。1955年の農業センサス結果をみても、ブドウ栽培農家は全農業経営体の約3分の2に達している。1988年時点でも、ブドウを栽培する農業経営体の数は272,133におよび、これは全農業経営体の26.8%を占めている。しかし、1979年時点での状況が、それぞれ429,384経営体、34.0%であったことを考え合わせると、ブドウ栽培は農業経営体レベルでも次第に専門化しつつあるということが出来る。

このような傾向は、栽培地域の分布が特定の産地に集中しつつあるという前節で述べた動向とまさに符合している。もっとも、ブドウ栽培をしている農業経営体のなかには、現在でも自家消費用ワインだけを製造するものが数多く含まれている。本節では、主として1979年と1988年の農業センサス結果を対比しながら、近年の醸造用ブドウ栽培の生産構造変化を検討するが、公表されている統計には、販売を目的とするブドウ栽培経営体だけを集計したものと、非販売をふくむ全ブドウ栽培経営体を集計したものが混在している。以下では、両者をそれぞれ「ブドウ栽培経営体（販売のみ）」および「ブドウ栽培経営体（非販売をふくむ）」と呼んで区別することにしたい。ちなみに、前者のブドウ栽培経営体（販売のみ）は、1979年時点で236,900経営体、1988年現在では166,282経営体が存在した。

フランスにおけるブドウ栽培の専門化は、ブドウ栽培経営体の規模別構成にみられる近年の変化に如実に表れている。もともと、ブドウ栽培経営体には自給的色彩のつよい小規模経営体と、商業的な性格をもつ中規模・大規模経営体が混在しており、大規模経営体は数こそ少ないものの面積的にはブドウ畑全体の大きな部分を占めてきた。1979年時点でみると、ブドウ畑規模10ha以上の経営体は、フランスのブドウ畑全体の約半分を経営している。この比率は、1980年代を通じてさらに上昇しており、1988年には58.9%に達した。これは、主として自給的経営体や小規模経営体が、ブドウ栽培を中止したことに起因している。実際、経営体数にしろブドウ栽培面積にしろ、減少と増加の分解軸は10-15ha階層にあり、10ha未満のブドウ畑しか持たない階層は、1980年代を通じて顕著な衰退傾向を示している。

増加しつつある大規模経営体は、多くの場合、上質ワインの生産に特化した専門的経営体であり、ブドウ栽培の近代化や合理化を推し進めてきた主体でもある。これら経営体のブドウ畑では、農業機械が積極的に導入されるなど、ブドウ栽培に投入される所要労働時間が大幅に短縮されて、労働生産

第3表 代表的ワイン産地におけるブドウ栽培経営体（非販売をふくむ）の規模別構成の推移（1979-1988年）

産地	年次	経営体総数	ブドウ栽培面積規模別構成比						
			0.5ha未満 (%)	0.5-1 (%)	1-2 (%)	2-5 (%)	5-10 (%)	10-20 (%)	20ha以上 (%)
ラングドック	1979	57,915	16.7	14.6	15.5	18.1	15.9	13.2	6.0
	1988	45,112	17.0	13.6	14.1	16.6	15.0	15.9	7.8
アキテーヌ (ボルドー)	1979	19,028	21.5	14.8	13.1	18.6	16.6	10.7	4.7
	1988	13,861	18.3	11.1	10.0	16.7	18.1	16.0	9.7
シャラント (コニャック)	1979	28,235	38.3	11.5	8.9	16.1	15.1	8.3	2.3
	1988	18,800	41.2	8.4	5.7	13.5	15.6	11.7	3.8
ロアール川流域	1979	20,175	48.5	17.0	11.9	11.2	7.1	3.5	0.9
	1988	12,014	47.9	13.9	9.5	9.9	9.7	6.8	2.4
アルザス	1979	12,330	65.6	10.1	8.2	11.6	4.0	0.4	0.1
	1988	9,072	54.9	11.6	10.3	13.6	8.3	1.1	0.2
シャンパーニュ	1979	10,212	33.9	17.6	19.5	23.3	4.5	0.8	0.3
	1988	10,621	34.3	16.4	17.7	24.4	5.8	1.0	0.3
ブルゴーニュ	1979	3,275	51.2	7.7	7.0	16.5	12.8	4.1	0.7
	1988	2,224	36.0	7.6	7.1	20.9	18.9	7.7	1.7
ボージョレ	1979	6,701	30.6	12.2	10.0	21.3	22.6	3.2	0.2
	1988	4,775	18.9	9.6	8.4	21.1	34.7	6.9	0.4
フランス全体	1979	429,384	47.8	15.9	10.7	11.6	7.7	4.5	1.8
	1988	272,133	44.7	13.5	9.6	12.3	9.8	7.0	3.1

(1979年および1988年農業センサス結果による)

注) 各産地の構成比については第1表の(注)で示した。

性が飛躍的に向上した。これは、ブドウ栽培における雇用労働力の激減によく表れている。とりわけ、1980年代に顕著な変化としては、ブドウ収穫機の普及があげられる。手摘みの場合1ha当り110時間から120時間かかっていた収穫は、機械を用いることで約5時間にまで短縮されている。1970年代に所要労働時間の半分近くを占めていた収穫作業が、これによって大幅に軽減されたことになる⁷⁾。

しかし、これらの全国的な傾向は、かなりの地域差をともなっている。第3表は、主要なワイン産地別にブドウ栽培経営体（非販売をふくむ）の規模別構成と、1980年代を通じての変化を示したものである⁸⁾。各産地の規模構成とフランス全体のそれを比較すると、階層構造が産地間で大きく異なっているために、フランス全体の値がどの産地にもあてはまらない単なる集計値であることがよく分かる。

上質ワインの生産に特化した産地についてみると、ボルドーワインで有名なアキテーヌ地方の大規模性が目だっている。ここでは、数十ヘクタールから数百ヘクタールに達する「シャトー」経営が従

来から発達していたが、外国資本をふくむ企業的な経営体にブドウ畑が集中する動きが、1980年代を通じても活発に進行した。この結果、1988年時点では、Gironde県全体の醸造用ブドウ栽培面積のうち45.0%が、ブドウを20ha以上栽培している経営体に属すまでにいたった。これらの大規模経営体では、管理人を雇用してブドウ園の経営を委任する例が多くみられる。1979年時点で、このような管理人はフランス全体で2,300人と報告されているが、県別にみるとGironde県がもっとも多く、575人に達している⁹⁾。また、ブドウ収穫機の普及がGironde県で進んでいる事実も、このような経営規模特性を反映している。

アキテーヌ以外の上質ワイン産地は、経営規模の小ささによって特徴づけられるが、いずれの産地においても小規模経営体の脱落が、1980年代を通じて着実に進行した。ブルゴーニュやボージョレなどの産地では、特に0.5ha未満の経営体が大幅に減少した結果、5ha前後の中規模経営体が産地の中核を形成している。これに対して、近年においても需要が順調に伸びつつあるシャンパーニュやアルザスでは、経営体数の大きな減少はみられず、依然として多くの経営体が小規模なままでブドウ栽培を続けている。

これに対して、テーブルワインの産地であるラングドック地方の動向をみると、10ha未満のすべての階層で経営体数が大幅な減少をみせたため、結果的には規模構成に大きな変化が生じていないようにみえる。しかし、アキテーヌ地方と同様に、ここでも従来からブドウ畑の集積が進行しており、20ha以上階層の占める比率は全ブドウ栽培面積のうちで34.7%（1979年）から38.2%（1988年）へと着実に上昇している。もともと、ラングドック地方のブドウ栽培は、都市資本の少数大規模経営とその他大部分を占める小規模経営のコントラストによって特徴づけられてきたが、このような二重構造は、ラングドックの農村経済における醸造用ブドウ栽培の圧倒的比重のもとで、現在なお殆ど解消されていない。とりわけ、テーブルワイン用のブドウを栽培している経営体で、このような2極分化がはっきりと認められる。

企業的な大規模経営と家族的な小規模経営への2極分化は、フランスの多くのワイン産地で共通にみられる現象である。さらに、後者の小規模経営のなかには、補助的な経営部門としてブドウ栽培を行っているものや、引退生活者による経営体が数多くふくまれている¹⁰⁾。近年、醸造用ブドウを栽培する経営体が急速に減少してきた背景には、このような複合経営部門としてのブドウ栽培が各地で消滅しつつあるという事実がある。実際、代表的なワイン産地では、ブドウ栽培経営体（販売のみ）の大半が、経営類型としては「上質ワイン生産」あるいは「その他のブドウ栽培」というブドウ栽培に特化した経営類型に属している¹¹⁾。1980年代の動向をみても、テーブルワインやコニャックの産地をのぞくと、これらの産地のブドウ栽培面積は比較的堅調に推移しており（第2表参照）、約13万haというブドウ畑減少分の大半は、それ以外の地方、すなわち複合経営のブドウ栽培が多くみられた地方のものである。この結果、空間的にも経営的にも、醸造用ブドウ栽培は1980年代を通じて専門化の度合いをさらに増したといえることができる。

Ⅲ－３ 品種構成の変化

特定産地への集中・小規模経営体の脱落とならんで、優良品種への転換も近年の大きな変化の一つに数えられる。ワインの品質向上にとって品種の改良は不可欠の条件だからである。各産地には、それぞれ奨励品種・許容品種・禁止品種のリストがあり、AOCワインやVDQSワインの認定にさいしては、奨励品種を使用していることが重要な条件になる。したがって、AOCワインへの転換が急速に進んだ1980年代は、同時に品種の大幅な変化をともなっていたわけである。

今世紀のフランスにおける醸造用ブドウの品種変遷を検討するにあたっては、1870年代に蔓延したブドウアブラムシ病の影響を無視するわけにはいかない。この病虫害から免れるために、アメリカ種との交配品種がフランス全土に広く普及したからである。しかし、これらの交配種（一括してHPDと呼ばれる。hybrides producteurs directsの略である）は、得られるワインの品質が悪く、今世紀を通じてブドウ畑から排除する努力が続けられてきた。その結果、1958年時点においてもブドウ栽培面積全体の31%を占めていた交配種は、その後急速に減少し、現在では、上質ワインの産地ばかりでなく、テーブルワインの産地でも消滅の寸前である。ちなみに、これらの品種を新たに植えることは認められていない。

また、許容品種であるAramon種・Siebel種・Plantet種なども、その栽培面積を大幅に減らしている¹²⁾。したがって、フランスのブドウ畑は次第に少数の奨励品種にしばられつつあるということができる。1979年時点で、それぞれ2万ha以上の栽培面積をもつ上位11品種についてみても、第4位のAramon種以外はどれも奨励品種であり¹³⁾、それら10品種を合計すると醸造用ブドウ畑全体の62.8%を占めている。また、Aramon種は多収量品種ということで、テーブルワイン産地で広く採用されていたが、次第に他の奨励品種にとって替わられつつある。ちなみに、栽培技術の進歩によって、優良品種への転換にもかかわらず、単位面積当りの平均収量が大幅に伸びたことを指摘しておかねばならない。全国平均でみた場合、年間の収量は1950年前後に4kl/haであったものが、1980年代には6kl/haを超える水準に達している。

このような品種改善への努力は、テーブルワインの生産に特化しているラングドック地方で典型的にみることができる。第4表は、ルシヨン地方をふくめたラングドック・ルシヨン地域全体について、この30年間における醸造用ブドウ品種の変化を示したものである。商業生産を志向するラングドック地方では、すでに1958年時点からHPD（交配種）の比率がかなり低下していたが、その後も急速に減り続け、現在では消滅の一手前まできている。また、許容品種のAramon noir種にしても、1958年に3割を超えていた占有率が、1988年には1割以下まで低下している。1988年時点で上位を占めているCarignan noir種やGrenache noir種・Cinsault種は、いずれも赤ワイン用の奨励品種である。また、1980年代に入ってから、ローヌ川下流沿岸産地の代表的品種であるSyrah種が急速な伸びを示しているほか、アキテーヌ地方に多いMerlot noir種やCabernet Sauvignon種が高い成長率を記録している。

品種更新の進展にともなって、樹齢構成も大幅に若返りつつある。品種別にみると、衰退傾向にある品種では樹齢30年以上のものが多く、赤ワイン用の品種ではAramon種、白ワイン用の品種では

第4表 ラングドック・ルシヨン地域における醸造用ブドウ品種の推移（1958—1988年）

品 種	1958年		1979年		1988年	
	面積 ha	構成比 %	面積 ha	構成比 %	面積 ha	構成比 %
Carignan noir	145,800	35.6	174,900	44.2	143,300	40.8
Grenache noir	8,100	2.0	31,500	7.7	38,200	10.9
Cinsault	3,900	1.0	33,200	8.4	33,300	9.5
Aramon noir	129,500	31.6	57,500	14.5	32,000	9.1
Syrah	30	0.0	4,000	1.0	14,600	4.2
Alicante Bouschet	13,100	3.2	15,500	3.9	12,800	3.6
Grenache blanc	10,900	2.7	16,100	4.1	11,600	3.3
Merlot noir	—	—	2,300	0.6	9,100	2.6
Macabeu	4,400	1.1	7,100	1.8	7,600	2.2
Terret blanc	14,800	3.6	9,000	2.3	6,200	1.8
Cabernet Sauvignon	—	—	1,400	0.4	4,700	1.3
HPD(交配種)	41,200	10.0	12,600	3.2	4,900	1.4
その他	38,270	9.3	30,700	7.8	33,100	9.4
合 計	410,000	100.0	395,800	100.0	351,400	100.0

（1958年ブドウ畑調査結果および1979年・1988年農業センサス結果による）

注）ラングドック・ルシヨン地域には、Aude県・Hérault県・Gard県・Lozère県・Pyrénées-Orientales県の5県がふくまれる。

第5表 代表的ワイン産地における醸造用ブドウ畑の樹齢構成（1988年）

[単位：%]

産 地	3年未満	3—10年	10—20年	20—30年	30年以上
ラングドック	5.1	14.3	22.7	20.7	37.2
アキテーヌ	10.2	22.4	26.9	17.3	23.2
シャラント	3.6	10.2	43.0	24.0	19.2
ロアール川流域	8.7	19.9	25.9	19.0	26.5
アルザス	7.2	22.9	31.2	20.8	18.0
シャンパーニュ	9.8	17.4	29.6	30.7	12.5
ブルゴーニュ	4.7	14.8	26.7	21.1	32.6
ボージョレ	3.2	8.7	20.1	16.2	51.9
フランス全体	5.9	15.4	27.0	20.5	31.1

（1988年農業センサス結果による）

注1）各産地の構成率については第1表の（注）で示した。

注2）この表でいう醸造用ブドウ畑は、ブドウ栽培経営体（販売のみ）が経営するブドウ畑である。

Sémillon種などの場合、全株数の2分の1から3分の2近くが1950年以前のものである。これに対し、赤ワイン用のCabernet Sauvignon種・Syrah種・Merlot種など、品質改善のために近年積極的に導入されてきた品種では、比較的若い樹齢の株が多い。樹齢構成を産地別にみたものが第5表である。

近年、品種の更新がさかんに行われてきたアキテーヌやアルザスで、樹齢10年未満のブドウ畑が全体の3割前後を占めている。これに対して、品種的には一貫してGamay noir種が卓越するボージョレでは、逆に古いブドウ畑が大部分を占める。ラングドックでも、品種の更新が近年積極的に進められてきたものの、全体としてみれば、依然としてブドウ畑の若返りが進んでいない。しかし、これは構成比でみた場合であって、面積的には、ブドウ畑の改植が1980年代を通じて最も進んだのはラングドック地方であった。

IV む す び

フランスのブドウ栽培地域は、国内的にも国際的にもワインをめぐる市場環境が変化するなかで、大きな変貌を強いられてきた。本稿では、このようなブドウ栽培地域のすがたを、ブドウ栽培面積の変化・生産構造の変化・品種構成の変化など、近年とくに大きな変化をみせた諸側面に注目しながら、地域的な動向を検討してきた。それらの検討を通じて明らかになった点をまとめると、以下のように整理することができよう。

フランスでは、今世紀を通じてブドウ栽培面積が一貫して減少し続けてきた。そのなかでも、1980年代は減少のスピードが特に速まった時期といえる。ブドウ栽培面積のこのような縮小は、基本的には、次の二つの動向が重なり合った結果である。一つは空間的な集中である。すなわち、1950年頃まで、全国のかなりの地域でみられたブドウ栽培は、その後少数のワイン産地に集中しつつある。このような過程は、1980年代を通じても急速に進行し、かつて広いブドウ畑がみられたフランス中部や東部の農村から、少数の上質ワイン産地を除外すれば、ブドウがまったく姿を消すにいたっている。もう一つは商業的ブドウ栽培に特化した専門的な経営体への集中である。自家消費用ワインのためにブドウ畑を栽培する小規模な経営体や、ブドウ栽培以外の生産部門を主体とする複合的な経営体は、その数を急速に減少させている。もちろん、これら二つの動向は、地域的に密接に関連している。

これら二つの動向は、フランス農業全体にみられる近代化への動きと、多くの点で共通する性格をもっている。すなわち、機械化や合理化にともなう農業の生産性向上や規模拡大への動きであり、また、専門分化や自給生産部門の後退にともなう商業的農業の進展である。かくして、今日まで生き残っているブドウ栽培地域は、いずれも企業的で資本主義的な性格をもつブドウ産地といえることができる。

しかし、ブドウ栽培面積の減少は必ずしもワイン生産量の減少に結びついておらず、過剰生産の基調は依然として変化していない。このような中で、1980年代には、ヨーロッパ共同体（EC）の共通農業政策の一環として、ブドウ畑の「減反」が積極的に推し進められた。そこで対象とされたのは、テーブルワインの産地であるラングドック地方やコニャック用のブドウ栽培地域であるシャラント地方であり、これらの地域では醸造用のブドウ栽培面積が大幅な減少を記録している。これに対して、アキテーヌ地方やアルザス地方などの上質ワイン産地では栽培面積がむしろ増加を示した。したがって、醸造用ブドウ栽培に特化した産地についてみると、1980年代の動向は産地によってきわめて対照的だったことになる。ラングドック地方では、このような状況から脱却するために、以前からワイン

の品質向上に積極的に取り組んできた。その結果、1980年代には、とくにAOCワインの指定地区が著しく拡大し、またテーブルワインのなかでも品質のよいVin de Paysの比率が伸びるなど、産地としてのイメージや性格をしだいにえつつある。

注

- 1) フランスでは、原則として、1 ha以上（園芸農業の場合は20a）以上の農地を経営する事業体のことを農業経営体（exploitation agricole）と呼んでいる。これには法人もふくまれるため、日本の「農家」とは概念的に異なっている。もっとも、大半の農業経営体は、現在も家族経営である。
- 2) フランス国内では上質ワインの格付けとして、AOC（appellation d'origine contrôlée:原産地保証ワイン）とVDQS(vin délimité de qualité supérieure:上質限定ワイン)の2種類があり、前者のほうが高級である。これらの上質ワイン産地は、1936年以降に設定されたもので、土壌・日照・品種・栽培方法などについて国立原産地保証機構（INAO）の監督をうけている。ヨーロッパ共同体（EC）では、1970年からワインの品質をテーブルワインと産地限定上質ワイン（VQPRD: vin de qualité produits dans des régions déterminées）の2種類に区分しているが、AOCとVDQSは、後者のVQPRDに相当する。これに対して、上質ワインと大衆ワインの中間的な段階として、フランスではvin de paysというカテゴリーが存在するが、ECの分類にあわせると、これは原則としてテーブルワインということになる。
- 3) Gamay種は、ボージョレ地方以外でも広く栽培されているが、上質ワイン（とくにAOCワイン）の原料として用いられるのは、主としてボージョレ地方だけである。
- 4) もっとも、栽培面積の動向とワイン生産量の動向とは、必ずしも一致しない。ワインの生産量は年によって大きな変動を示すが普通だが、平均すると1950年代から1980年頃までは着実な増加傾向を示してきた。これは、栽培技術の向上によって単位面積当りの収穫量が伸びたことによる。この結果、栽培面積が減少していたにもかかわらず、テーブルワインの生産量は同期間を通じてほぼ一定水準を保っていた。しかし、1980年代に入ってからは、栽培面積の激減を背景に、ようやくテーブルワインの生産量が下降線をたどるようになった。これに対して、上質ワインの生産量は、栽培面積の拡大と単位面積当り収量の増加によって、1980年代においても順調な伸びを続けている。
- 5) 1970年時点における2県（Charente県・Charente-Maritime県）の醸造用ブドウ栽培面積は81,679haであった。したがって、1988年の時点では、1970年水準の近くにまで減少したことになる。
- 6) ラングドック地方以外では、シャラント地方のコニャック用ブドウ栽培地域とコルシカ島のテーブルワイン用ブドウ栽培地域が、この奨励金制度を利用して多くのブドウ畑を放棄した。
- 7) 収穫機械の普及は、地域によって差異がはなはだしい。地域単位にみると、最も普及しているのはポアトゥー・シャラント；アキテーヌ；ラングドック・ルシヨンなどの諸地域である。たとえば、ボルドーワインの産地であるGironde県では、機械摘みの割合が全体の3分の2近くに達している（1988年現在）。これに対して、ローヌ・アルプ；アルザス；シャンパーニュ・アルデンヌなどの諸地域では、現在でも殆ど手摘みで収穫が行われている。
- 8) 第3表には、生食用ブドウ栽培経営体もふくまれている。これは、1979年の農業センサス結果が、両者を区別して表示していないためである。しかし、生食用ブドウ栽培経営体は数が少ないうえ、そのうちの大半は醸造用ブドウ栽培も行っているので、傾向をみるには殆ど問題にならない。
- 9) 管理人経営者が100人を超える県は、他にHérault県（347人）、Aude県（301人）、Charente県（157人）の3県にすぎない。
- 10) 引退生活者によるブドウ栽培経営体は、1988年現在、フランス全体で37,350（販売のみ）に達し、そのブドウ栽培面積は80,162haであった。経営者の年齢は、当然のことであるが、60歳以上が大部分（92.4%）である。
- 11) 1988年の農業センサスでは、すべての農業経営体を17の農業経営類型（OTEX: orientation technico-économique des exploitations）にタイプ分けしている。このうち、ブドウ栽培に特化する経営体は「上質ワイン生産」と「その他のブドウ栽培」の2類型に属する。後者には、テーブルワイン用やコニャック用のブドウ栽培に特化する経営体のほかに、生食

用ブドウ栽培を主とするものも含まれる。これら2類型を合わせた「専門的」ブドウ栽培経営体が全ブドウ栽培経営体(販売のみ)に占める比率をみると、Gironde県では86.5%、Hérault県では89.7%など、テーブルワイン産地をふくめて主要な産地では全て高い値を記録している。これに対して、ブドウ栽培面積が急速に減少しつつある諸県では、専門的ブドウ栽培経営体の比率が低く、ブドウ栽培が複合経営部門として取り入れられていることが分かる。たとえば、ミディ・ピレネー地域では、販売用にブドウ

を栽培している20,652経営体のうち、専門的な類型に属する経営体は2,376(11.5%)にすぎない。

- 12) 1968年から1979年への変化をみると、Aramon種は124,052haから63,488ha、Siebel種は70,600haから4,450ha、Plantet種は26,157haから4,011haへと激減している。
- 13) ただし、同じ品種が産地によって異なる品質のワインをもたらす場合があり、ある産地で奨励品種であっても、他の産地では許容品種でしかないこともある。

参 考 文 献

- Bartoli, P. (1986) : L'impact des primes d'arrachage dans le vignoble languedocien. *Bulletin de la Société Languedocienne de Géographie*, **20**, 65~79.
- Carrère, P. and Dugrand, R. (1967) : *La région méditerranéenne*. Presses Universitaires de France, 160 p.
- Clout, H.D. (1983) : *The land of France 1815~1914*. George Allen & Unwin, 171p.
- Durbiano, C. and Réparaz, A. de (1987) : Wein und Weinbau in Frankreich. *Geographische Rundschau*, **39**, 688~699.
- Ferras, R., Picheral, H. and Vielzeuf, B. (1979) : *Atlas et géographie du Languedoc et du Roussillon*. Flammarion, 371p.
- Gilbank, G. (1974) : *Introduction à la géographie générale de l'agriculture*. Masson, 254p.
- Ministère de l'Agriculture (1981) : *Le vignoble français*. 87p.
- Ministère de l'Agriculture (1983) : *Exploitations viticoles et viticulteurs*. 84p.
- Ministère de l'Agriculture et de la Forêt (1990) : *Viticulture*. 97p.
- Ministère de l'Agriculture et de la Forêt (1990) : *Languedoc-Roussillon*. 32p.
- Pastor-Barrue, M. (1981) : *Viticulteurs en crise à Laure-Minervois*. Centre National de la Recherche Scientifique, 367p.

Recent Changes in French Viticulture Areas

Akira TEZUKA

French viticulture areas have experienced a great transformation through the 1970's and the 1980's. French people becomes much more moderate consumer of wine and increasingly oriented to high-quality wine (*vin de qualité*). Competition with Italian and Spanish viticulture areas also urged the structural change of French wine-producing regions. In this paper, major aspects of these changes, i.e. the changing location of *vignoble français* (French vineyards), the enlargement of farm-size, the improvement of *encépagement* (vine-plant varieties) and so on, are described through the examination of two viticulture censuses effectuated in 1979 and in 1988.

In the 1970's and the 1980's total area of vineyards for wine and brandy has shown a steady decline from 1.16 million hectares (in 1970) to 0.93 million hectares (in 1988). Moreover, the number of viticultural farms has decreased sharply from 0.66 million to 0.26 million in the same period. At the same time, the proportion of vineyards for high-quality wine showed a marked increase from a fifth to over a half of the whole.

But the circumstances and trends of viticulture varies considerably among major viticulture areas in France. In fact, French viticulture shows the greatest regional variety among European major wine-producing countries, owing to its relatively northern location and also to its multifaceted historical development. Among these viticulture areas, the Languedoc region which has been characterized mainly by its *vin ordinaire* (table wine), has suffered an important damage from recent transformation of market conditions and has pursued persistently after the improvement of quality of its *vignoble* and wine.